

# 純粹失読例におけるなぞり読み効果 なぞり読みが上手くいく時といかない時の違いは何？

村田翔太郎<sup>1)</sup> 若田浩志<sup>1)</sup> 大下靖夫<sup>1)</sup> 中田 孝<sup>1)</sup>  
村川孝次<sup>1)</sup> 竹中勝信<sup>2)</sup> 今村 徹<sup>3)</sup>

1) 高山赤十字病院 リハビリテーション科

2) 高山赤十字病院 脳神経外科

3) 新潟医療福祉大学大学院 保健学専攻 言語聴覚分野

**抄 録：**脳損傷により、言語機能のうち音声言語は正常にも関わらず、読字過程のみ選択的に障害されることを純粹失読という。これまで古典的な純粹失読は、視覚情報が文字として認知される過程の経路が離断されることで読めなくなると説明されている。そのため視覚認知の経路が障害されていても運動覚が保たれていれば「なぞり読み」することで文字を読めるとされており、これまでの純粹失読のリハビリテーションは「なぞり読み」が推奨されてきた。しかし臨床では運動覚が保たれていても「なぞり読み」で文字が読めない時のある症例が存在し、その障害メカニズムは一定の見解が得られていないのが現状である。今回我々は、運動覚そのものは障害がないにも関わらず「なぞり読み」で読めない時のある純粹失読例の読字障害を詳細に検討し、この現象は文字の視覚刺激が運動覚から文字を認知する過程の経路を抑制したと考えると説明可能であると考えられた。